



中国がわかるシリーズ12 西暦25年、[東]漢立つ

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明

西暦 25 年、新を倒して、漢王室の一族、南陽出身の劉秀が帝位につき(光武帝)、都を洛陽に移しました。これまでの漢を[西]漢(前漢)、光武帝の王朝を[東]漢(後漢)と呼んでいます。光武帝は、(動乱中に略奪されて奴隷身分に落とされた人々を救済するため)何度も奴婢を解放し、租税を減免(行財政改革を断行し小さな政府を実現)するなど、戦乱で荒れ果てた国土の回復に努めましたので、国力は回復に向かいました。また、29 年には洛陽に太学(国立大学)を建て、儒教の浸透を図りました。1 世紀に入って、ようやく儒教 1 尊の状況に到達したのです。そして、[東]漢の時代以降、孔子の子孫は厚遇を受けることになりました。

40 年、ベトナムでは、徴姉妹(ハイバチュン)による独立戦争が起こりましたが、3 年で鎮圧されます。56 年、泰山で封禪を行った光武帝は、翌 57 年に没しますが、同じ 57 年、倭の奴国王が、光武帝より金印を授与されています。この金印は、九州、志賀の島から出土しました。これについては、塚本青史が「光武帝」という小説に描いています。67 年頃、首都、洛陽城西に、白馬寺が建立され、西域から仏典を招来したと云われています。仏教が、中国に入ってきたのです(最も早い説ではBC2 年説があります。なお、同じ頃、南方の海路、ベトナム経由でも仏教が中国に伝来したと考えられています)。

光武帝は、劉邦同様、匈奴に対しては消極策で応じましたが(48 年、匈奴はお家騒動で再び南北に分裂し、南匈奴は[東]漢に臣従していました)、モンゴル高原に残った北匈奴が国境を窺うようになったので、2 代明帝(57~75)は、遠征軍の派遣に踏み切りました。その中に班超(33~102)がいたのです。明帝は、74 年に西域都護を置き、[西]漢末以来の西域支配を復活しました。

91 年、4 代、和帝は、西域都護を再び置き、班超を責任者に任命しました。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」と部下を勇気づけ匈奴を破った班超は、ほぼ 30 年にわたって西域の経営に努めることとなります。92 年には、北匈奴が壊滅して逃走し、97 年には、部下の甘英を、国交を求めてローマ帝国に派遣しましたが、甘英はシリアまでしか到達出来ませんでした(ローマ帝国からは、166 年に、使者が、海路来朝しています)。班超は、北方遊牧民との交渉に関して「水清ければ大魚なし(後に、水清ければ魚棲まず、として人口に膾炙)」というアドバイスを残しています。なお、班超



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

の兄妹は、「史記」と並び称される「漢書」を執筆した班固、班昭です。107年、西域都護は廃止されましたが、127年には、班超の子、班勇が、再び、西域諸国を服属させました。これが、漢帝国西域支配の最後の輝きでした。

[東]漢では、科学が発達しました。儒教では、王莽や光武帝が図讖の書(予言の書)を信奉したため、讖緯思想が流行しましたが、王充(27~90)は、自然現象が上帝の意思の反映であるとする天人感応説や讖緯思想を厳しく批判しました(代表作は「論衡」)。王充の唯物論的な批判精神は、科学の発達と決して無縁ではありません。なお、讖緯思想は、世を惑わすものとして、後に、隋の文帝が禁止しましたが、わが国の陰陽道の祖形となったと考えられています。

[東]漢中期に成立した「九章算術」では、既に、負の数や分数の概念が見られますが、数学の進歩は天文学の進歩を促し、1年の長さが精緻に計算されるようになりました。100年には、許慎が「説文解字」(現存する最古の漢字辞典)を完成、105年には、蔡倫が紙を造って皇帝に献上しました(紙は、BC2世紀の麻紙から徐々に進化を遂げ、蔡倫によって完成されたと考えられています)。これによって、隷書から、紙に書きやすい行書が生まれ、更に、行書から楷書が生れることとなります(なお、草書は、[西]漢まで遡ります)。

漢字は、(創初の)彫るものから書くものへと変化して、ここに、書道が誕生したのです。紙の普及による情報革命が、400年続いた漢帝国を滅ぼし、400年続く大分裂時代を将来したという説もあります。また、132年には、月食の原因を解き明かした張衡が、天球儀と(世界初の)地震計を造っています。磁針も、実用化され、中国の誇る4大発明(紙、印刷術、火薬、羅針盤)のうち、2つが、[東]漢の時代に現れました。この他、長く医聖と呼ばれた張仲景や全身麻酔を世界で初めて行った華佗も、[東]漢の人でした。薬物学の「神農本草経」が成立したのも[東]漢の時代です。儒教の經典に注釈をつけた在野の大学者、鄭玄も、[東]漢末期に活躍しました。因みに、儒教では、鄭玄など[東]漢、三国時代の注釈を古注、13世紀の朱熹などによる注釈を、新注と呼んでいます(厳密に述べれば、朱熹に先行して王安石の新学派による注釈が一世を風靡した時代がありました)。